
ONE PIECE ?黒髪少年の描く世界?

霧宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE

PIECE

？黒髪少年の描く世界？

【Zコード】

N7434Z

【作者名】

霧宮 海

【あらすじ】

時は大海賊時代。イーストブルーに住む少年が持つ夢は『画家』。なんとも地味な夢だと人は言うがそんな事関係ない。いつか世界政府の隠している現実を描いて暴きたい。そのチャンスをうかがつていたとき、少年の目にした新聞で少年の人生が変わった！この話は少年大和が海賊の頂点をむわら一味と田指す話！

プロローグ

時は世界政府時代

政府の者が全てを握っていた時代

オレは新聞に釘付けになつた。

あのロジャーが死んだ。

海賊王と呼ばれた彼が。

でも彼は死に際のことんでもない言葉を残した。

「俺の財宝か？欲しけりやくれてやるぜ……探してみる。この世のすべてをそこに置いてきた！」

その一言で全ての人が立ち上がった。

これに乗らない手はない。

これを逃したらきっと俺の夢は叶わない。

少年が立ち上がる。

「じいちゃん！俺海賊になる！そんで世界一の画家になつて裏の世界を写すんだ！」

イーストブルーに浮かぶ『ニホン』といつかつぽけな島。

その島で育つた少年大和。 17歳。

これはその少年の半生を描いた話?????

プロローグ（後書き）

短くてすいません！

本編いつきまーす！！

第1話 大和VSじいちゃん

「じいちゃん！俺海賊になつて裏の世界を描くよ！－」

俺は新聞を見るなり一緒に住んでるじいちゃんのところへ飛んで行つた。

俺はじいちゃんと二人暮らし。母さんと父さんは自分の兄と一緒に別のところに住んでいる。三人は『天竜人』なんだ。俺は母さんと母さんの浮氣相手の間にできた子だから『半天竜人』？

正直天竜人は最悪だと思う。言葉使いおかしいし奴隸買つてるし。だから俺は母さんの浮氣相手の父さんと一緒に住んでいる。じいちゃんはいきなり転がり込んできた俺を歓迎してくれた。今まで邪魔者にされていて家でも奴隸と同じような扱いだつた俺にとつてその暖かさはすごく身体に染みたのは今でも纖細に覚えている。

じいちゃんは庭で絵を描いていた。俺が画家になりたいのは多分じいちゃんみたいな絵が描きたいからだと思う。悔しいけど。俺は身長が175cmは超えてつからじいちゃんよりでかいだろ？。俺がじいちゃんに勝つてるのはそれくらい。強さも結構強いつもりだつたけどじいちゃんの前ではかなわなかつた。だからそれいらいずつと鍛えている。

「今なんと言つた

「海賊になつといひやれこやつ」

〔冗談っぽく言つてみる。

「ぱつかもんがあああ……」

「つむーーあつぶねえ何すんだよじこひやんーー！」

いきなり絵筆を投げてきたのだ。絵筆は畳に刺さつてこる。良い子はまねしないでね

「なにを言つとかと思えば何事じやー海賊なぞもつてのほかー」

「じいちゃんこの新聞見たか？」

まじで怒っているじいちゃんとは正反対に、「ツ リ笑つて新聞を差し出す俺。じいちゃんは無言でひつたくり、田を丸くする。

「ロジャーが…死んだか」

じいちゃんがとても懐かしそうな目をするから驚いた。だがそれはほんの一瞬で。

「大和！わしと勝負せい！わしに勝つたら小舟も用意してやる！」
しかめつ面で言ひ。俺が言ひ出したら止まんない事を知つての上の判断だら。

「つほーーじいちゃん太つ腹ーサンキューーー！」

「わしに勝つてからじゃー道場に来いー！」

「素手でわしに命中をつかせたらお前の勝ちじゃ」

「あつがとうじこひやんー食料もくれたりもつと嬉しこんだが」

「勝つてからじゃと…壇つておろひー。」「

いきなりじいちゃんのローキックがくる。

「うおー! 不意打ちはひでーよ! 」

慌てて上に飛び退いて一回転して着地。

「海軍なぞ卑怯者ばつかじや」

してやつたりと笑うじいちゃん。俺の記憶が正しければこの人もつ

つのはじつてるはずなんだけど。

「じいちゃんがうつへり腰になつても寝むなよー。じいちゃんの顎めがけて下から足を振り上がる。

「遅いわ！」

振り上げた足を足で蹴られる。

「あらり。自信あつたんだけどな
体勢を整え、今度は顔面に向かつてパンチをくじり出す。だがそれも
じいちゃんの手によつて塞がれる。

「遅いのう。わしゃ眠くなりそうだ」

「これだけで終わりだとでも？」

逆の手で頬に向かつてパンチをくじり出す。

ドコッ

綺麗にヒットする。でもこれだけで倒れてくれるじいちゃんじやない。

「少しあはできるようになつたな」

「一番最初の時は俺もショックだつたよ？一発も入んない上に一発
でダウンだもん」

「今はどつかの？」

真正面からパンチがくる。突然の事だったので対応できなかつた。

ドガツ

クリーンヒット

あー。俺の前でたくわんひよーじが飛んでるよー。でもヒーリー倒れる
わけにはいかない。このチャンスを逃したらもう機会がない気がす
るから。

世界政府は絶対何か隠してゐる。それを暴いてやりたい。そつするには海賊になるのが手つ取り早い。海軍の方から寄つてきてくれるからだ。

倒れそうになるのをグッと耐える。

۱۱۳

相変わらずじいちゃんのパンチは効く。じいちゃんの横を駆け抜け、首に腕をかける。

11

ପାତା ୧୦୮

દ્વારા બાળ કાવ્ય

パラパラパラ

天井からなんか降つてくる。田の前には仰向けに倒れたじいちゃん。

「か……つた……？」

「ふん、わしの身体が衰えただけじや。だが約束は約束だ」

来い、と言い道場を出て行くじいちゃん。慌ててついていく。

腰何ともないのか？俺結構本気の一撃だつたんだけど。

第1話 大和△Sじーちゃん（後書き）

話が進まないい！！

第2話 悪魔の実

「いやーじいちゃんには感謝だなーうん。船も使いやすそうだし食料もくれたし!」

ほんとに感謝している。今大和は出航して海の上だ。そしてそこで重大な事に気づく。

俺航海術持つてねえええ!!

てか俺何処目指してんの!/?二ホンはイーストブルーだけど最早どっちがイースト!/?じいちゃんがくれた食料はおよそ一週間分。

少なくとも一週間は生きれる。

本物の海賊に会わなければ。

とつあえず一週間は安心して島を探せるとこい事。

本物の海賊に会わなければ。

海賊会つちゃつた――――――！

なにこれ噂をすれば影!?俺噂する人いないんだけど、俺一人で思つてただけ――――――！

そんな事を思つてゐる間に近づいてくる海賊船。クルーは30人位らしい。

「我ら“悪武劣海賊団”の名にかけて――――――！」

ちょっと待てええ！！こいつ等何！？何“悪武劣海賊団”て！暴走族みてえ！カタカナにしたら“オムレツ海賊団”だし…

海賊達が小舟に乗り換えてこちらへ向かってく。

アホ？

本当何こいつ等。

全員でこいつを来たら船どちらに決まってんじやん。

その通り。クルー含め船長まで小舟でこいつを来てしまったのだ。
馬鹿の極みである。

「これは盗らない手はないっしょ！」

よつここしょと食料の入った袋を持ち上げ

飛ぶ。

「ニヨウヒツビ…」

船の甲板の端に着地する。

「ふーん。結構良い船だな
周りを見渡して言ひつ。

「んじゅおひさんー」こちらの船はありがたくないだきまーす！
「なーおこお前等ー急いで船に戻れーあの船にはせっかく見つけた
悪魔の実があるんだー」
「「「「「お、おおおーー」」」

悪魔の実？なんだそりゃ悪魔みてーにマズいってことか？なんでそ
んなやつ大切なんだよ。

急いでオールを漕げりとする海賊達。

「あそーだ。忘れてた。おっさん達悪いね、そのへん爆弾落としちやつたかも！ポケットに入れるべきじゃないなー」

〔 〕 〔 〕 〔 〕 〔 〕 〔 〕

おっさん達が涙目になりながらつぶやいた次の瞬間

目の前で大爆発。

たんだ？」

出発前にじいちゃんに渡された「こまくら」の黒い弾。

『海賊達が寄つてきたら初めは「これを撒く」とい。花火の実といつての。わしも若い頃はこれで遊んだもんじやい』
ガハハハと豪快に笑つて渡してきた。じいちゃんはもしかしたら海賊だったのかもな。爆薬で遊ぶとか普通じゃねーもん。

帆を張つて風に任せて船を進める。

俺のモットー

『まあどうにかなるつしょ』

船内を見て回るとまずキッチンがあつた。冷蔵庫をのぞくとそこそこ食料はあつた。仮にも30人いたしな。これで一ヶ月は保つ。ていうか保たせる。

ん？冷蔵庫の横にある箱なんだ？宝箱みてー。

開けるとやくらんぼのよつなものが入つてた。なんだ宝じゃなかつた。何故さくらんぼようなものかつて？色がまづおかしい。次に何か変なぐるぐるみたいな模様が入つてる。

でもこれは…食べてみるしかないっしょ！

やくらんぼもじきを口に令む。

「おえつ。何これ。げうまぢつ。」

だがここの引いたら男じやなああい！

目をしかめて全部口に放り、飲み込む。

ドクン

ノウハウ

ノウハウ

「な、なんじついやあーーー?」

第2話 悪魔の実（後書き）

もう少しで麦わらひやん達出します！

第3話 麦わらの一昧

「なんじゃこりやああ！？」

変な実を食べ終えた瞬間大和の身体に異変が起き始めた。すぐさま果物のはいつていた箱に飛んでいく。中には研究所みたいな紙が入っていた。

「こ、これになんか書いてあるか！？」

急いで紙をめくつていく。

「あ、あつた！なにに…これは悪魔の実で『クサクサの実』！？
ロギア
自然系。さつきおっさん達が言つてたのはこれのことだつたのか！
え、おいちょっと待てよー！悪魔の実を食つたら一生カナヅチ！？航
海始めてこれがよ…」

落胆してしゃがみ込む。大和の指が葉になりハラハラと落ちていったのだ。もちろん戻れ～って念じたら戻つたけど。

「ああああーこれから一生カナヅチかよ…」

どうするよー。これで俺海に落ちねーぞー。

甲板に戻り寝転がる。

「いや、俺のイイトコは + 思考なとこだ！戦闘に使えねーかなー」
それからの俺の趣味はその能力で何ができるか考える事と絵を描く
事だった。画材も積んであつたから助かった。海と空というのは相
性がいいらしくいい絵になる。

いやでも俺も海賊なめてた。本当認めるよ。

もうかれこれ航海を始めた日から2ヶ月経っていた。食料なし。戦えてもこれじゃ意味ねーしなー。

そういえば寝るのが一番体力使わないって言つよな…

一眠りすっか…

そうして意識が遠のいた

「…と、ちょっと。ちょっと起きるつってんのよーーー。」

耳たぶを掴まれて大声で叫ばれる。

「うわあーなんだ！？」

慌てて飛び退く。目の前にはオレンジ色の髪の女人が立っている。顔からしてずいぶん強気そうな。

「あ、起きた。ルフィーーー！起きた！」

「うおおおー！そおかあ！」

そう言ひマストの上から降りてきたのは麦わら帽子をかぶった男の子。じつちは氣さくそうだ。

「つて、えええええええ！？腕がのびてる！？」

そう。ルフィと呼ばれた男の子はマストの上から腕を伸ばして下に降りてきたのだ。

「ふふふ、そうね彼は悪魔の実の『ゴムゴムの実』を食べたからオレンジ色の髪の少女と一緒にいた青いロングヘアの子が説明してくれる。

「私たちの船があんたの船を偶然見つけて何かないかと思つて探つてたらあんたが倒れてて拾つてやつたのよ。感謝してよーーー。」

オレンジ色の髪の少女が腕を組んで言つ。

「ナミさんたら、一番頻繁に彼の様子見にきてたじゃない
オレンジ色の髪の少女はナミといつらしい。

「び、ビビー余計な事言わないの！」

ロングヘアの少女はビビといつらしい。

「今サンジさんが食べ物を作ってくれてるわ。」

「あ、ありがとう！」

「ししあつ、お、お前、仲間んなれ！」

「え」

「ちょっとルフィー！？こんなよく知らない人を！？」

「いいじゃねーか仲間は多い方がいいんだ！」

バタン

「おお。起きたのか。本当は野郎に出してやるメシなんざねーんだ
がナミさんが出せつて言つしよ。おら」

そう言い黄色の髪の人¹がご飯を置いてくれる。たぶんこの人がサン
ジという人だろつ。

て、どうか何この飯。めっちゃ輝いてんだけど。

普通の空腹でも輝いて見えたんだろうが飢えきっている俺にとっちはもう仏が見える程だつた。思わず食らいつく。

「なんお！」わ。めつたりせりつまえ」

食いながら書つてゐるため言葉がおかしくなる。

「だろ。クソうめえんだよ。俺の飯は」

サンシが「ガツと笑ってタバ」の煙を吸う。返事をする間も惜しく大きく頷きながら口にご飯を詰め込む。正直いつもならタバコの煙は苦手だが全く気にならなかつた。

「ピノキオか？」

「ウソッ！ ピノキオだよ！」

おおー、シッ！ 三担当か！

「ウソップ、それは仕方ないわよ。名前聞いてなかつたんだし」「ん？ おお、そうか！ ジャあ仕方ないな！ オレは！」の船の船長、キヤプテンウソップだ！」

腕を腰に当てる上を向き高々と言ひ。

三

」――>！？

「彼は狙撃手よ。彼の腕はすごいんだから！ そういうえば… チヨツパー君は？ さっきまであなたの看病してくれてたのよ」

ルが違ひ…

「あ」

ビビがマストの下を指す。

「…」の船は鹿を買つてんのか
そこにいたのは鹿みたいなもの。なんか隠れようとしてんのかもし
んないけど丸見えだ。

「あれがチョッパー君よ。ついさっき仲間入りしたね」
「そうか。看病してくれてたんだってな。サンキュー」
チョッパーの方にニカッと笑う。

「別にそんな事言われてもうれしかねーぞ、こんなにやうひー…」
いやめつちゃ嬉しそうな顔してるよ?身体くねくねして踊りだしち
やつてるよ?」

「あれ?ミスター武士道はビビかしら」

第3話 麦わらの一味（後編）

黙ってすこませんーー！

ここまで読んでくださりありがとうございますーー！

第4話　自己紹介

「あれ？ミスター武士道はどこかしら」

「M・武士道？」

「ええ。三刀流の剣士でこの一味の残りの一人よ。
辺りを見渡して言つ。

「へー三刀流ね…すげ…！」

ザンツ

「え！？」

「切れた…」

「どうなつてんだ？」

「あーーらひ。斬られちつた」

剣士に腹を切られ上半身と下半身が別れる。

「奇妙な身体してんじゃねーか」
すぐに葉を集めもとの身体に戻る。

「まあな。ここの船長とおあいこだ」

「仲間になるにしては怪しそぎる」

「どうしろと？オレ身分証明書ねーつすよ？面接受けねーつす。
戦うつてもオレに物体的な攻撃は利かない」

つかの間の沈黙。

「どうせり無駄のようだな」

緑頭の剣士が剣をサヤに納める。彼は腹巻きを巻いてこじりひと
しては何とも気の抜ける格好と言えた。

「よ、よほほほほーしー」の俺様が面接してふさわしいか判断して

「…ひや

びびり徘徊してんじゃねーか。

ウソップが机を持ってきて俺とウソップの間に置く。これ面接って
どうか取り調べ？ライトあるし。俺そんなに怪しかったかなー。さ
つきまで一番俺の事疑つてたゾロとか言ひ劍士はもうあそこで寝息
たててんだけだ。

「どうから来た

「二ホン

「趣味は」

「絵を描く事」

「特技は」

「絵を描く事」

「（）の一昧に入つてやりたい事は」

「絵を描く事」

「出身以外全部『絵を描く事』じゃねか――――――」
おお、つっこみきた！

「しじしじ。んじゃおれも質問」

ルフィが机の横に立つ。

「夢。なんだ？」

「裏世界の真実を描く事――」

「（）合格！仲間んなれ――」

「よのじべ。」

「どうわけで俺はめでたくこの一味に歓迎されたんだ。

「ねえあなた名前何？まだ聞いてないわ

「ナミが言つ。そーだつた。仲間になるつてのに名乗つてないのはや
ばいな。ナミが椅子に座つていたのであぐらをかいだ。

「ヤマトだ。漢字では大きいに平和の和だ。」

「ふーん。カンジとかよくわかんないけどヤマトねーようじへー！」

「ナミが笑つて言つてくれる。

「こしてもさつきのなんだ？自然系の悪魔の実つてことは確かだが^{ロキア}」

「サンジがこ。それもまだ言つてなかつたつけ。

「『クサクサの実』だ。」

そう言つて身体からいろいろな葉を出してみせる。この数ヶ月でわかつた事だが葉であればいろんな種類の葉が出せるらしい。盾になりそうなでっけーのから剣になりそうなちつこいものまで出せる葉の種類は多種多様。でもこには無難にもみじにしておいた。

「わあ…きれい…」

ビビ達が驚き、みとれている。確かに俺の出す葉は綺麗だと思つ。この能力を手に入れてからこの葉を舞わせて絵を描いた事も沢山あつた。

「だろ?」

少し得意げになる。

「それにこの能力は戦闘でも役に立つしな

そういうえばこの船は今どういう状況なんだ?何処に向かってんだろ。そのことをナミに聞いてみるとどうやらビビは王国の王女でビビの国が『バロックワーラクス』といつ組織によつて崩壊する危機だとう。そこでバロックワーラクスを倒すべくビビの王国であるアラバスターに向かっているのだという。大雑把にまとめると。

途中でチョッパーが仲間になつた話とかもあつたが結局仲間になつたんだ。それでいい。

「それにしてもこの一味には能力者が多いな」

俺も含めて3人。ビビも入れて8人の中だ。これは結構多いと言えるんじゃないかな?

「ルフィイが『ゴムゴムの実』。俺のが『クサクサの実』。チョッパーのは…『シカシカの実』か?」

「『ヒトヒトの実』だ!元がトナカイなんだよ!」
チョッパーがつっこんでくる。なんだ突つ込み多いな。

そうして俺たちの船はアラバスターへ向かう。

第4話　自己紹介（後書き）

「メ&感想よろです！」

第5話 オカマ

とうあえずこの一味に歓迎されて一安心。

… という訳にもいかないんだなあ これが。

問題1

食料がない

問題2

カルーというビビの連れてる『超カルガモ』を餌にサメとか海王類（馬鹿でかい海の化け物と思ってくれてい）。始めて見た時は俺もぶつたまげた）を釣ろうとする人が現れる。ビビが阻止。

（ちなみにルフィとウソップ）

問題3

それで結局サメも海王類も釣れず変なオカマが釣れた。

「いやーホントにスワンスワン」

あぐりをかいて謝っている（のか？）。ルフィとウソップが釣った獲物はとても食えるものではなく期待を裏切るものだつた。しかも釣れた後海に落ちて再び釣り上げる羽田になつたのだ。ビビにとっては食われなくて一安心なのが。

それにして奇抜な服装だ。なんというか…何ともいえない。頭の上にポンポンが二つ付いていて背中からは一匹の白鳥が左右にのぞいている。んで背中には『おかま道^{ウホイ}』と書いてある。自分はおかまですと宣言しているはある意味清々しい。そんでまあバレー靴を履いているあたりからバレーをしているんだろう。

「見ず知らずの海賊さんに命を助けてもらつなんて、この御恩一生忘れません！…あと温かいスープを一杯頂けるかしら」

「…「ねえよ…」」

「「うちが腹へつてんだ！」」

その場にいるビビ以外全員がつづけむ。

「ほんとこいつちが食いもん欲しこくらうだよ
ため息まじりにつぶやく。

「アラ……」

ビビを見つけてオカマが言つ。ビビは見つけてほしくなかつたとい
う顔。

「あなたカーワイー わねー好みよ? 食つちゃいたい、チユツ?」

「…………」

はい嫌われたー! 絶対嫌われたー! まだよなー。オカマに好かれ
ていい気分の女がいたら是非お田にかかりたい。

パンツ

「うべつ……！」

「……！」

ルフィがオカマに右手で顔面パンチを食らわす。

「何を……！？」

ゾロが鞘に手をそえる。

「待……つて待……つて待……つてよ……う、余興代わりよ……う……！」

「な……！……？」

ゾロもあっけにとられる。俺だって勿論驚いてるよっていうか船員全員驚いてる。

さつきまでオカマ野郎だった奴がルフィになっているのだから。その後のオカマの話によるとオカマが食ったのは『マネマネの実』ら

しい。右手で相手の顔に触れ、左手で自らの顔に触れると触れた人の顔になるのだという。メモリー機能付きで過去に触った人の顔は忘れないらしい。実際に過去触った人の顔を見せる。確かにこれはすごい。その後ナミ、ゾロ、ウソップ、チョッパーを触って遊んでいた。

ちなみにこの能力では体型も本人と全く一緒になるらしい。

この能力にはルフィィ達（ルフィ、ウソップ、チョッパー）も大喜びで何かもう親しくなつていた。あんたらまだ会つて数分だろ…。ナミとゾロも呆れてそれを見ていた。

すると向こうから何やら叫びながら船がやつてきた。

「なあ。あの船じやねーの？お前が乗つてた船。」

「あら！？もうお別れの時間！？残念ねい！」

「「「え、——！？もう行くのか——？！」」

「悲しむんじやないわよう！…友情つて奴あ…つきあつた時間と関係ナッスイング！！」

オカマが親指を上に突き立てて言つた。

あ。そうだ。

「なあ。よかつたらこれ」

さつきまで描いていたオカマの絵を渡す。

「あら！？あちしじやなあ——！かわいく描いてあるわね——！
——貰つていくわ！」

「それをよく見て心を入れ替えるといい」

「ん？ どういう意味かしら？ まあいいわ！ 行くわよお前達！」
自分の船に乗り換えて言つ。 ていうか… 自分の絵を見て目覚まして

ほしかつたんだが逆効果だつたか？

「 「 「 「 「 はい！ M r . 2 ボン・クレー様！」 」 」 」 」

「 「 ー！？ M r . 2 ー！？」 」

ん？ 何でみんな驚いてんだ？

第5話 オカマ（後書き）

あつせんじおめでと"アヤコ"さんです——!!

投稿遅れまして…

「うち的にはボンちゃん大好きなんですよねー。うちの中ではベスト10に入るのではないか。みなさんはどうでしょう? ?

華やかに出してあげたいです。

「メ&感想よろしくです!途中までしか読んでない人でも是非?

ハートはちとキモかつたつすね

第6話 オカマの正体

オカマの名前がMr・2ボン・クレーだといつ事がわかつて船内に緊張が走る。

何で?変わった名前だけどなんでこんな空氣?
それを察したらしくナミが説明してくれる。

「わざわざこの国を危ぶませてるバロックワーカスって説明したでしょ?」

話を聞くとどうやらそのバロックワーカスの幹部にはやはりコードネームがあり、男は数字+Mr. 女はミス+イベント田という具合らしい。今までであつた中で例をあげるとMr.5、ミス・バレンタインというかんじだ。男女一組のペアらしい。

「へー。んでわざわきのオカマがそのバロックワーカスの幹部だったと。」

「やうよ……まあいわね、あいつが私たちを敵とみなしたら……」

「仲間を信用できなくなる」

俺が言つとナミも我が意を得たり、と頷く。

あれ。でも…

「さつきビビが話してくれた話によるとビビはその組織に潜入してたんだよな。あいつの事見た事なかつたなか?」

ビビが頷く。

「ええ。見た事はなかつたんだけど噂には聞いていたわ。まさかあいつだつたなんて…！」

「うわさつて？」

「大柄のおかまでオカマ口調、白鳥の口調を愛用していく背中に『^{ウエイ}おかま道』^{ウエイ}とあるつて…」
「「「「氣づけよ」」」

この件で分かつた事は二つ。

1、バロックワークスの幹部にオカマの能力者がいる。

2、ビビは鈍い！

「ちょっと俺サンジんとこ行つてくる

「なんだ
ガチャ

「ああヤマトか
よかつたー。名前覚えてもらえてたー。

「今ちよつとあつてな。報酬」。

「? そりか

相変わらずフライパンをいじりながら言つ。

「サンジぐーん。ちよつと来てー（裏声）」
「んナーミすわーん！ 僕に用事でもー？」

サンジがすゞい勢いでこつちを振り返る。確かにこれはヤバい。俺がナミの声真似しただけで目からハート飛び出でる。あのオカマがナミに化けたらサンジは戦闘不可能だぞ。ビビに聞いたところサンジは極度の女好きというかフェミニストというかとにかく女は蹴らないらしい。いや蹴れないのか? いやいやそしたらただのヘタレになつちまつ。蹴らないんだ。

「あれ、ナミさんは?」

はてなマークを浮かべるサンジを無視して鍋に近寄る。

「これあんこ! 何に使うんだ?」

「ん? ああ。『今日のお菓子』だ。てめー二ホンから来たつて言つたな。倭の国だろ? そこの菓子は俺も好きなんだ。つてことで作つてみた」

サンジが他のを指差して言ひ。『ここにはこんな種類のお菓子があつた。沢山の種類のがあるのさおそらく一ホンの菓子が小さく一人用が多いからだろ?』

「おおおー! みたらしーー! 」

俺がみたらしを指差して言ひ。

「好きなのか?」

「ああ。大好物だ! でも…」

少し考え込む。

「装飾が気に食わない」

「俺の装飾はクソ完璧だーー! 」

サンジが食つてかかる。やべ、地雷踏んだ! よほど頭に来ているらしくクソの使い方が何か違う! 。

「ち、ちがうちがう! 文句とかじやなくして! 俺の国の菓子つてよく下に葉っぱとか敷いてあるんだ。こいつこいつ」
手から笹や柏を出してみせる。

「彩りが増すだろ? もともと縁の国だしよ」

お菓子に敷いてみせる。顎に手を当てて考えるよつと見ていたサンジが顔をあげる。

「やついう事か。確かにな。ずっと海の上にいると葉っぱとか忘れちまうんだ」

よかつた。とりあえず安堵のため息だ。

「葉っぱならこへりでも出せるから装飾に必要になつたら言ひてく

れ」

じゃ、といつて退散する。みんなの元に戻るとチョッパーがあわあわと包帯を用意していた。

誰かケガでもしたのか？あいつらに限つてないと思つんだが…

第6話 オカマの正体（後編）

話が進まない！！

うう。すんません。

口メ&感想よろしくです。

「何やつてんだ？」

みんなのところへとお互いに包帯を腕に巻き合つてこねいりだつた。

ケガつて説じやなやうだが…

「あ、ヤマトさん…ヤマトさんもこれ…」

そう言つて、ビビが包帯を渡していく。何で包帯？俺ドコもケガしないんだけど。

「ゾロがな、あのオカマ対策をしようつて。はー、はーみ」
チョッパーがはさみを渡してくれる。

「あんがと」

「ゾロが？おい、もうそいつがオカマ野郎なんじゃないか？」

「てんめ…一いこ度胸してんじやねンか…！」

「ははは…」Just a joke ([冗談だよ) 「

腕に結んで縛る。サンジもいつの間にか呼び出されついてウソップからそのMr.2について聞いていた。

ルフィが左腕を前に突き出す。他のみんなもそれにあわせて突き出す。

「とにかくこれから何が起るかも、これが仲間の印だ！」

一
あ
あ

「上陸するぞ！…飯屋へ…あ、あとアラバスターはオマケかよ！」
「アラバスターはオマケかよ！」
すかさずツツミニが飛ぶ。

船が岸に近づいたとたんルフィは飯屋へ目がけていつてしまつた。
俺も画材買ってーなー。でも俺もその前に飯だな。

「こつドコにくれば？」

「私とかビビ、ウソップとかはたぶん大体ここにいるわ。ゾロは使いに出すから時々ないかもしないけど」

「ておい！俺使い決定かよ！」

「なーによー。あんたローグタウンでの借金まだあるんだからそれ返済してから言ってよね」

「は！？それはウイスキークンとかで返しただろー！？」

「半分ね。それがまだ残ってるわ」

「こんにゃう…」

「んナーミすわわあーん！俺が買い出しに行つときます！」

「あらほんとー！？じゃあサンジ君には洋服類頼もうかしら

「了解しました！」

その後ハリケーンの」とく買い出しに行つたサンジ。ゾロも渋々行く。なにせら俺が仲間に加わる前いろいろあつたらしく。

「とこいつで。ヤマトも行つてきていいわよ。ここから船も見えるから留守番もいらないしね

それじゃあとこいつことありがたべおこじばに甘える。

「飯屋飯屋…意外にないものだな。香水屋ばっか」

周りを見渡して言う。すると道のいち番奥に飯屋と思われる建物が見える。

やつとだ。数日食つていなかつたから早く行きたくて草になつて飛ぶ。端から見たら氣味悪そだがみんな各自の買い物に夢中だ。

「着いたあ。おじさん！飯！三人前！…ん？」

何か妙に静かだ。ん。前にいんのだれ？手前にいるのが十手を背負つていて背中に『正義』と書かれたジャケットを来てゐる。んで葉巻を吸つてゐる。厳つい顔で何か迫力負けしそう。

それに比べておぐのカウンターに座つてゐる男は氣さくそうな顔でそばかすがあり、上半身はだか。何で訴えられないんだろ…。いかんいかん、話がそれた。黒い膝までのズボンをはいていて頭にはオレンジの帽子。丸い顔みたいなモチーフが一つ付いていて一つは笑つてゐる顔、もう一つはなんか…よくわかんない変な顔。なんかホントにどう説明したらいいかわかんない。

そんでその二人がなんか問題があるらしく、客がみんなさけている。なんで？

「すいませーん。あの、カウンターの席空いてますよ？」

「ああ？」

うわつこつわー。

「すんません。なんでもないです
一礼してカウンター席に着く。

「おじさんー飯！三人前！」

「え…あ、ああ、少々お待ちを…」

店主もびっくりしたらいにか分かんこという顔。じまじくしたら飯が出来た。

「おお～ひやひびきの飯イ～んおぐ～んむんむ～うんめええ～～！
おじさん最高！」

「あ、ありがとよ……」

「プハハハ！まさか海軍の前で」こんなにじきやかに飯を食つ奴がいるなんてな！」

右に座つてたそばかすの男が笑う。海軍？

「お前が海軍なのか？」

「あ？いやいや俺あ海賊だよ。海軍は」しきだ。」

そう言い葉巻野郎を指差す。まじでー。

「それはそれはお仕事」ご苦労様です。」

そう言い座りながら一礼してまた食べ始める。

「プハハハハハ！！海軍としつてもその態度かー気に入つたー名前は？」

「ヤマトだ

「何やつてんだ？」

「海賊兼画家」

「「「「海賊ー？」」んな奴が！？」」

周りの客が驚く。こんな奴がツッてひどくね？

すると知った声が聞こえてきた。

「…ムゴムのぉお口オケットオオーーーーーーーー！」

ルフィが店内に飛び込んできたのだ。

第7話 ナノハナ（後書き）

「メ&感想よろしくです！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7434z/>

ONE PIECE ?黒髪少年の描く世界?

2012年1月8日19時52分発行